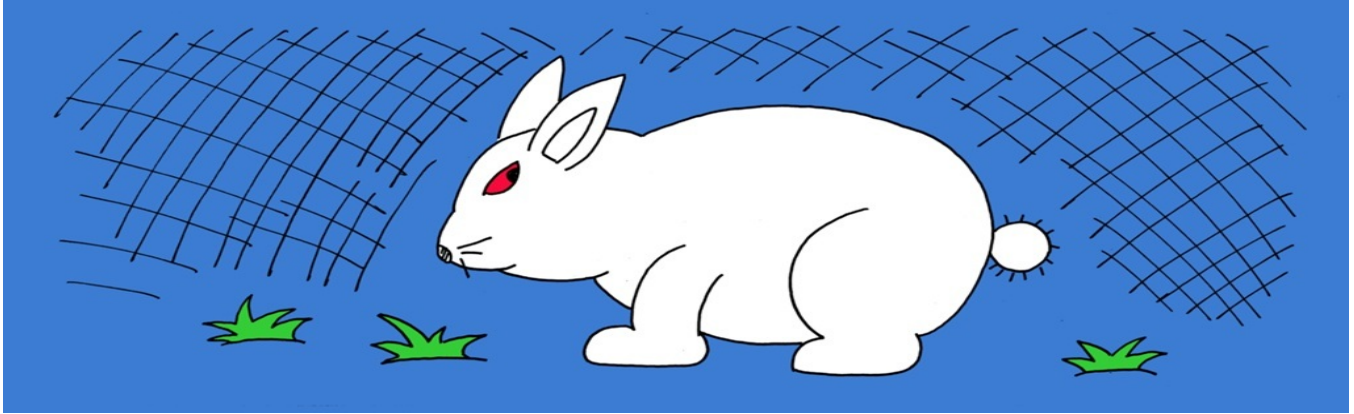


雪うさぎ



ある夜、家に帰ったらマンションの広場に何か白い動物がいた。広場の植え込みにわずかに残っている冬枯れの草の上でしきりに鼻を動かしている。

うさぎだ。



うさぎはすでに私に気づいている。草を食べるふりをしながら、それとなくこちらのようすをうかがっている。

とりあえずしゃがむ。相手がしゃがんでいるのにこちらが立っているのは相手に失礼というものだ。

このへんに野うさぎがいるわけではない。まるまると太っている。明らかに家うさぎである。どこかで飼っていたのが逃げたのだろう。そういえば、小学生の息子が「学校で飼っていたうさぎが逃げた」と言っていた。

犬や猫はよく見かけるが、夜中に散歩するうさぎは初めてだ。野犬にでも見つかったら、それこそ噛み殺されてしまう。誰かが捕獲してあげないといけない。それに、こどもたちに見せたら喜ぶだろう。数週間前、長男が飼っていたハムスターが死んだばかりである。

わたしはしゃがんだまま後退する。たも網を取ってこなくては。

1, 2年前、こどもたちとキャンプがてら、丹沢にハヤを捕りに行った。そのときに買った、たも網がある。結局、ハヤはその名のとおり速すぎて一匹も捕まらなかった。いちばん下の娘が、その網を私の頭にかぶせては喜んでいる。

「うさぎがいるよ」

居間でテレビを見ていたこどもたちに言った。

「うさぎ？どこ？」

「おとうさん、うさぎ、どこにいるの？」

2番目の息子に続いて下の娘が言う。中学生の長男は何も反応しない。

「外にいるんだよ。マンションの広場に白いうさぎがいるんだ」



わたしはクローゼットにしまってあった、たも網を取り出した。

うさぎ1羽はゆうに捕まえられる大きさだ。柄の部分は3段に伸びる。買ったときはけっこう高かった。ハヤでの屈辱をようやくはたせる日がきた。

「ゆみちゃん、来る？」

大のおとなが、夜ひとりでも網を振り回しているのは変である。それでなくても、わたしはすでに「あそこのおとうさんは変わっている」という評判を得ている（らしい）。とうとう気が狂ったかと思われかねない。カモフラージュに娘はちょうどよい。

「行く！ ゆみちゃん行く！」

予想どおりの返事が返ってきた。この子は5歳で、わたしが誘うとたいていのところへはついてくる。

「止めときなさいよ。夜なんだから。おとうさんひとりで行ってくればいいのよ」

これも予想どおりの声が台所から聞こえてきた。

「ゆうじも行くか？」

妻の声を無視するかのようにつづった。

「行ってどうするの？」

小学5年のこの子は、このところ理屈っぽい。何かというと、

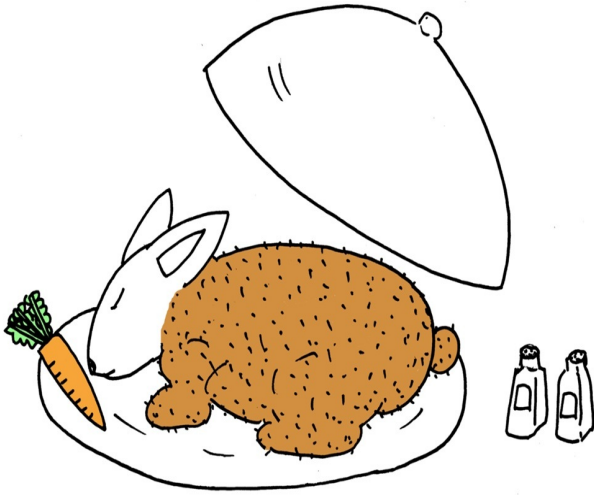
「いつ？ どこで？ 誰が？ 何時何分何秒？」

と相手をませっ返す言い方をする。

「捕まえるんだよ。うさぎを捕まえて、うさぎのから揚げを作るんだよ。おまえたち、から揚げが好きだろ？」

最近のこどもたちは何かというとすぐにトリのから揚げを食べたがる。

「止めてよ、おとうさん。気持ち悪いこと言わないで」



妻が顔をしかめている。

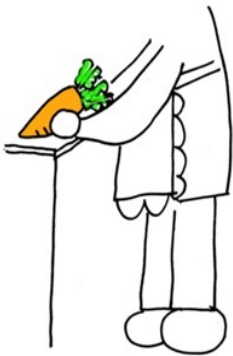
「うさぎのから揚げだって、ウェッ！」

下の娘は嫌悪すべきことがあると、すぐに「ウエッ！」と言って口に手を当てる。

わたしは冷蔵庫を開け、ジュースを飲むふりをしてニンジンを探す。いつもなら、スーパーで買ってきた、新鮮なニンジンが下の野菜室に入っている。

ない!

しょうがない、代わりにサツマイモをポケットに入れる。冬枯れの草を食べているぐらいだから、サツマイモはうさぎにとってごちそうのはずだ。



「さあ、行くぞ」

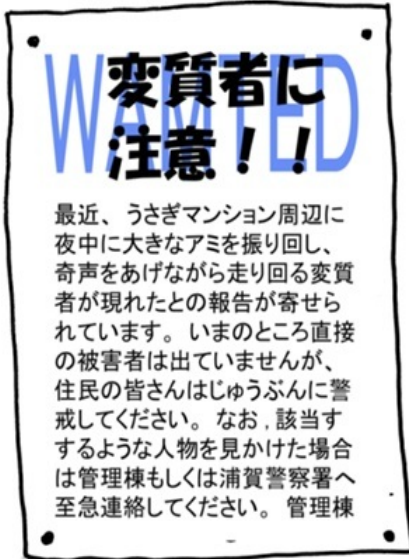
「わーい網だ！ゆみちゃんに持たせて！」

「だめだ。うさぎはおとうさんが捕まえるよ」

そうなのだ。うさぎはわたしでないと捕まえられないだろう。こどもたちに網を持たせたところで、ワーワー騒ぐだけで、戦略的に捕まえるなんてことはとても無理だ。

「ゆうじ、行くぞ」

有無を言わせず、次男も連れて行くことにする。

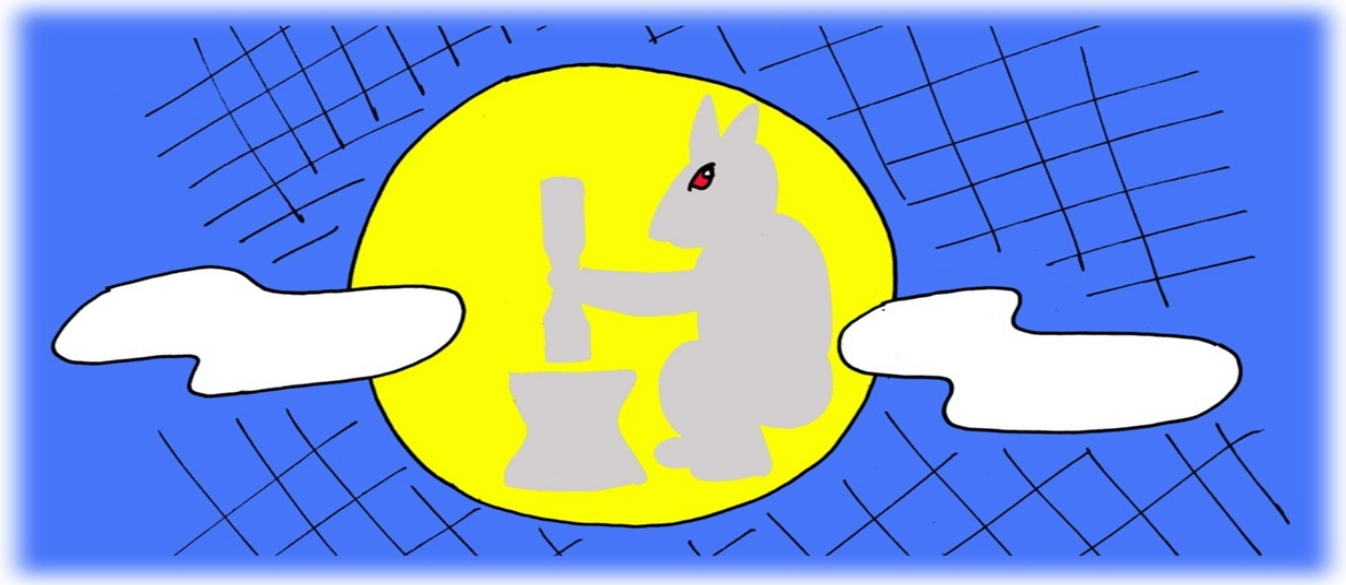


うさぎを捕まえたら段ボール箱に入れ、冷蔵庫にあるレタスとほうれん草をあげよう。かみさんがいないときをねらってやればいい。窓を作って、そこにビニールを張り、外から中のようすが見えるようにする。段ボールにはみんなで野原やニンジンの絵を描こう。ほかのうさぎの絵も描いてあげれば楽しくなる。

うさぎの名前ははどうしよう？ピオンタやピオンコではありふれている。ピーターも洋風でいいかもしれない。マンションの掲示板にうさぎの持ち主を探す張り紙を出さなくてはならない。小さくていい。張り紙を出した事実が残ればいいのだ。結局、持ち主は現れないだろう。

こどものころ、田舎でうさぎを飼ったことがある。うさぎの世話は大変だ。すごく臭い。小屋の中の糞を出し、きれいなワラを敷いてあげなくてはいけない。いまだきワラなんてただで手に入るのだろうか。毎日、新鮮な草を取ってきてあげないといけない。朝露で濡れている草をあげると下痢をするはずだ。たまには草はらに連れ出して、思うぞんぶん運動をさせてあげよう。

「うさぎ捕獲隊」は隊長以下2名、マンションの4階からエレベーターを使って地上に降り立った。



「作戦開始！全員、ほふく前進！」

迷彩服で全身を固めたわれわれはマンションの住人に会わないことを願いながら進んだ。だが、うさぎはいなかった。

「おかしいなあ。たしかこのへんにいたんだけどなあ」

「うさぎちゃん、逃げちゃったんじゃないの？」

と小隊長。

「おとうさん、どんなうさぎ？」

副隊長が聞く。

「白いやつだよ。大きい、おとなのうさぎ。目が赤いの」

暗闇に目をこらせてもそれらしきものは見えない。

丸い大きな月が出ている。まさか月に帰ったわけでもあるまい。

「どのへんにいたの？」

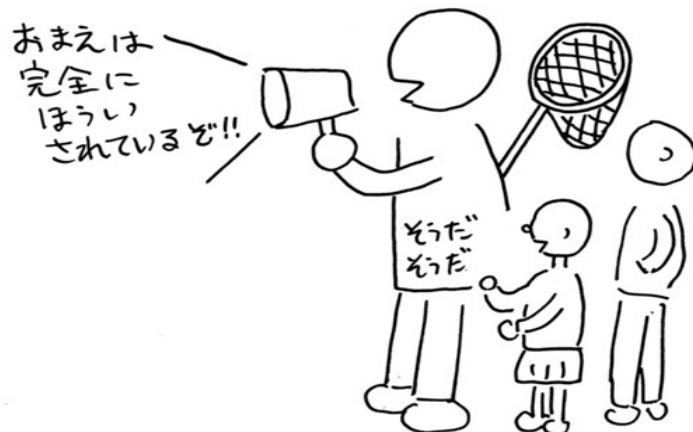
「あの、草が生えているあたり」

隊長はコンクリートの地面にわずかに露出している土を示した。

もしかしたら、生垣の陰に隠れたのかもしれない。広場を囲んで5棟建っているマンションはそれぞれをぐるりと生垣で囲んである。

「ゆうじ、生垣の間を探しておいで」

「ゆみちゃんも行く！」



「大きい声を出しちゃだめだよ」

隊長は部下にささやく。

ふたりは早速、生垣の中に消えた。

広場を囲むマンションの窓には明かりがついている。みんな、テレビでも見ながらアハアハ笑っているのだろう。

しばらくして部下たちが戻ってきた。副隊長が小声で言う。

「いたよ、おとうさん。あっちにいた」

「いたいた。おとうさん、あれ、雪うさぎだよ」

娘は白いうさぎのことを「雪うさぎ」と表現する。幼稚園で、そんなうさぎが出てくるお話を読んだらしい。

隊長はたも網を両手で抱え、うす暗闇をにらんだ。

お前は完全に包囲されているぞ！

ほどなく、生垣の陰から雪うさぎが飛び出してきた。わたしを見てもたいして驚くふうでもない。わたしがたも網を手をしていることを相手は先刻承知である。左手のたも網を背中に隠す。反対に右手でポケットからサツマイモを出して見せる。しゃがんだまま相手ににじり寄る。1.5メートルぐらいまでの距離に縮まる。するとうさぎはぴょんと跳んだ。安全圏を知っているのだ。かしこい。

サツマイモの端を持って相手の鼻先に近づける。

ほら、おいしいよ。食べな。

うさぎに食べさせなければ、大学イモになって、こどもたちのお腹におさまるべきものなのだ。この季節、サツマイモだって安くはない。

うさぎはしきりに口を動かせる。半分はわたしを見ながらも半分は逃げるべき方角を見ている。

「おとうさん、サツマイモじゃ無理だよ」

副隊長が耳元でささやく。

「雪うさぎはニンジンが好きなんだよ」

小隊長が言う。

わかってるわい。そんなこと。

「シーっ、お前ら黙ってろ」

こっちは自分の夕飯もまだなんだ。

これ以上近づくのは無理だ。ためしに相手の鼻先にサツマイモを投げしてみる。うさぎは別段驚きもせず、地面に落ちたサツマイモに鼻を近づける。すぐに顔をそむけた。

完全にばかにされている。わたしはゆっくりとたも網を背中から出し、相手との距離を測った。届きそうもない。かといって、3段式の柄を伸ばしている余裕はない。そこで、わたしは

うさぎの好物ベスト4

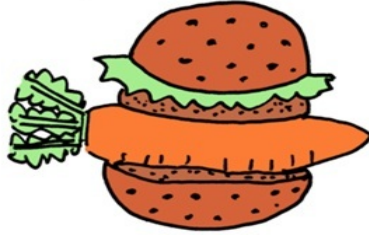
キャロット
ソフトクリーム



キャロットジュース

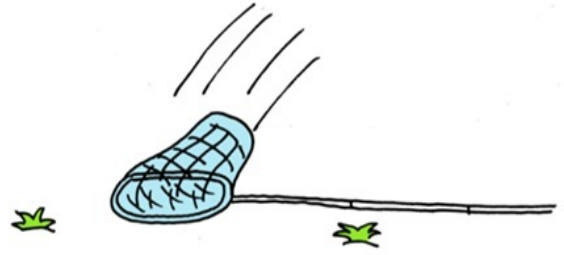
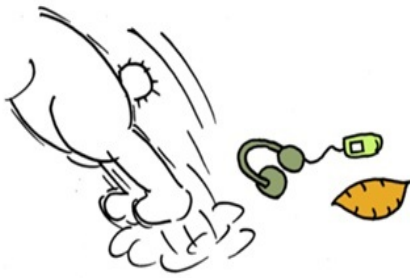


キャロットバーガー



キャロットラーメン
しょう油あじ





自分でも明らかに無謀とわかる策に出た。

うさぎに向かって、いきなりたも網を投げつけた。

えいっ！

計画ではうさぎの上からたも網がすっぽりかぶさるはずであった。

しかし、たも網がわたしの手を離れる前にすでにうさぎの両足は地面を蹴っていた。

たも網がコンクリートの上に落ちる音だけがやたらに大きく響いた。

うさぎは5回ほど飛び跳ね、わたしの出方をうかがっていた。

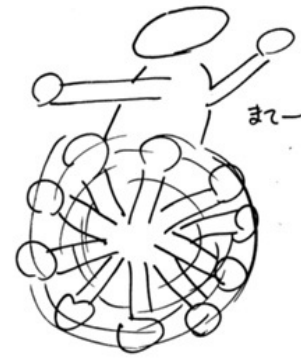
わたしは地面に落ちている網を拾い上げ、それこそ脱兎のごとく駆け出した。うさぎはまさかわたしが駆け出すとは思っていなかったようだ。不意を突かれたようすで相手もまた脱兎の勢いで駆け出した。隊長の後に副隊長、その後に小隊長が続く。

うさぎを追い駆けてみてわかったことだが、うさぎは速い。ふだんは、丸っこくて少しもすばしっこそうには見えない。けれど本気を見せたときのうさぎはすごい。試しにうさぎを見つけて追いかけてみるとよい。どれぐらい速いか知って驚くだろう。

うさぎは走るのではない。跳ぶのである。後ろ足で地面を蹴って宙を飛んでいく。全速力で走ればこんな小動物の1匹ぐらいかんたんに捕まると思った。そうではないことはスタートした瞬間にわかった。こちらが1歩踏み出している間に、あちらは3回ぐらいジャンプしている。わたしは走り出した勢いで駆けてはみたものの、「こいつは捕まらないぞ」ということがすぐにわかった。

うさぎはまっすぐに駆けたかと思うと急に角度を変える。こちらはそうはいかない。この10年ほど運動らしい運動をしていない。すぐに息が切れた。心臓の音が聞こえる。背中や首の周りに汗がふき出す。これでも高校生のころは短距離ではだれにも負けなかったんだが……。

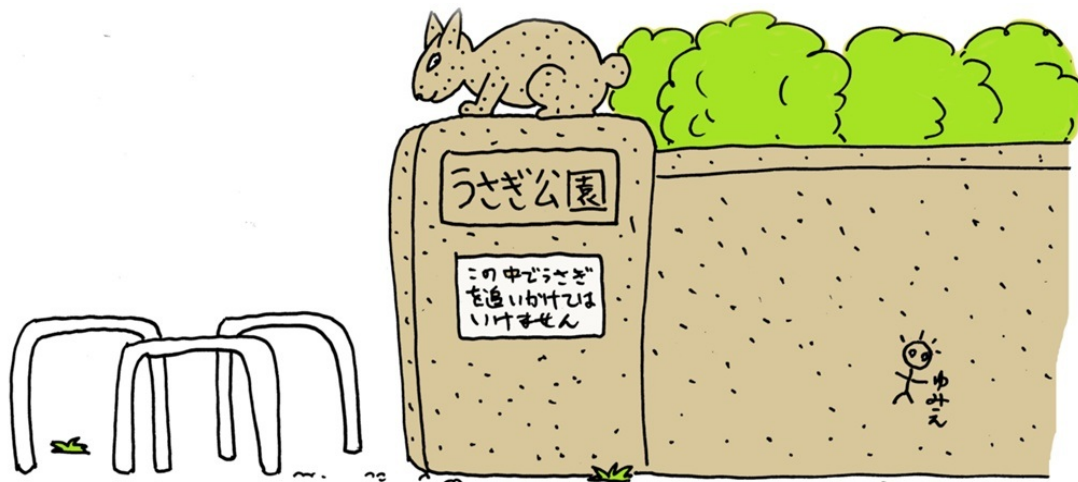
わたしが止まるとうさぎも止まる。なるほど。無駄な弾は使わないというわけだ。ますます、かしこい。



体をふたつ折りにし、ぜいぜい言っている隊長に代わって副隊長と小隊長が後を追う。隊長はつぶやいた。

いまや作戦は各自の判断に任せる。

うさぎは敷地内にある公園に逃げ込む。公園の草木を巧みに利用して逃げる。わたしはあきらめた。飛び道具を使うか、わなをしかけるか、あるいは犬でも使わない限り捕まえるのは無理である。



イギリス人だって、うさぎ狩りのときには馬に乗り、犬を使ってうさぎを網に追い込むというではないか。

「おーい、帰るぞ！」

部下に作戦終了を告げた。隊長の声が聞こえたのか聞こえないのか、部下たちは長らく忘れていた本能を取り戻したごとく、うさぎを追いかけて公園内を走り回っている。またしても、たも網が役にたたなかった。

わたしはそのまま家に入った。

遅い夕食を食べていると下の子が泣きながら入ってきた。

「どうしたの？」

「あのね、雪うさぎを追いかけていたらね、壁があってね、そこの壁にね、ゆみちゃんの鼻をね、壁にね、ぶつけたの」

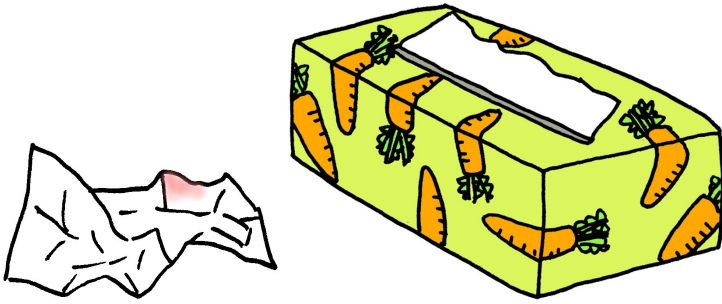
そういえば公園の出入り口にコンクリートの厚い壁がある。暗がりを夢中で走っているうちにあの壁に鼻をぶつけたのだろう。

鼻血が少し出ている。ティッシュペーパーをちぎって詰めてやる。目のふちに残っている涙を手でぬぐってやる。

「だから止めておきなさいって言ったのよ」

母うさぎが怒っている。

次男を呼びに行った長男が戻ってきた。



「まったくいつまで遊んでるんだよ」

いつもは自分が母親から言われているのと同じせりふを言っている。おかしい。

次男はふくれている。

「うさぎ、どうした？」

「知らない」

「雪うさぎね、駐車場のほうへ逃げて行っちゃったよ」

ティッシュペーパーが説明する。

駐車場の裏は山になっている。このへんはまだ山が残っているのだ。月明かりの中、山を上って行くうさぎが見えるようだ。

元はといえばわたしが悪い。こどもたちに罪はない。わたしは娘を抱き上げた。この子は日ごとに大きくなっていく。前は軽々と抱き上げることができたのにいまでは「よいしょ」と掛け声でもかけなければ抱き上げられない。

わたしは娘の耳にささやいた。

「おみやげがあるよ」

娘の表情が変わった。

わたしはときどき「おみやげ」と称して娘に絵本やキャラメルを買ってくる。どんなに機嫌を損ねていても、「おみやげがあるよ」と言うと、娘はたちまち機嫌をなおす。



「おみやげ見てみる？」

白い紙が小さく動いた。

実はこの日、帰りがけに横浜の書店でピーター・ラビットの絵本を買った。前から買おうと思っていたのだが、ほかにもいろいろと買ってあげたいものがあり、ピーター・ラビットの本はあとまわしになっていた。

娘に絵本を見せる。箱には「ピーターラビットの絵本」とあり、服を着たうさぎがニンジンを食べている絵が描いてある。

「お風呂に入ってから読もうね？」

いつものように娘を風呂に入れ、風呂場でティッシュペーパーを取ってあげた。血はもう出ていない。いつもは母親と寝るのだが本を読むときだけはわたしのベッドに上がる。娘に腕枕をし、仰向けになったまま本を開く。

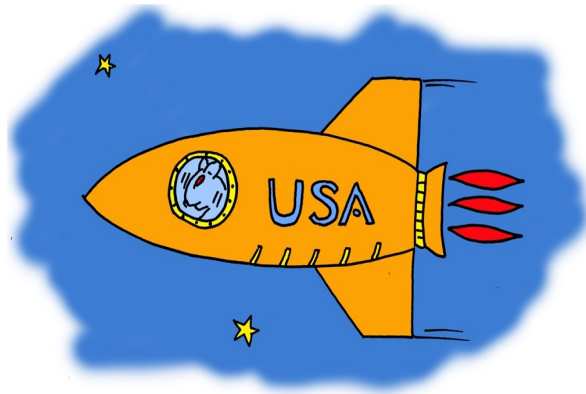
「・・・けれど、ピーターは たいへんな いたずらっこでいたから いちもくさんにマクレガーさんのはたけにかけつくと、むりやり、きどのしたから、もぐりこみました。・・・マクレガーさんはピーターを見ると、とびあがって、れーきをふりふり、どろぼうだ、どろぼうだ！ とどなりながら、追いかけてきました。ピーターはこわくて、はたけじゅうをにげてあきました。

どっちへいったらきどがあるか、わからなくなっただのです……」

見ると娘はすでに眠っていた。鼻の下が少し切れ、かすかに血の痕がある。わたしの腕の中で雪うさぎのような寝息をたてていた。

—おわり—





おわりに

この話を書いたとき、娘は幼稚園児でした。その娘もいまや小学校6年生です。順調にいけば来年はきっと中学生になるでしょう。

家の近くの海に「くじらが来ているかもしれない」と誘いをかけるとなんの疑いもなくついてきた女の子が、いまではクラスの女の子や男の子と連れ立ってボーリングに行っています。

娘が大きくなり、あとをついてきてくれる者のなくなった父親はあいかわらずひとりでアミを振り回しています。いったいなにを捕らえようとしているのか、実は当人にもよくわかっていないと思います。

製作中の本書を娘に見せたら、娘は即座に小学6年生用の算数の教科書を持ってきました。その本の巻末に人間が走ったときの時速とうさぎのそれが書いてありました。それによれば人間は時速36km、うさぎは72kmだそうです。

*本書は娘の12歳の誕生日プレゼントに作られました。

2005年12月26日

*あれからちょうど5年が経過しました。今月の26日で娘は17歳の誕生日を迎えます。そこで父は娘に電子ブックでこの本をプレゼントしたいと思います。すでに彼女は高校2年生です。ノートパソコンを駆使し、インターネットの世界で雪うさぎを追いかけております。

2010年12月26日

